奔流

題字揮毫・梅原猛

«第23号»
■発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL　042-381-7770
■発行人・市川　久芳（共同代表）
■編集人・矢間秀次郎（正 会 員）
■〒振替・00120-0-710488

«もくじ»

■特集：“核の傘”にゆらぐ核兵器の非人道性 ～広島・長崎・ビキニの凄惨な歴史を心に刻む～
2頁・「ビキニ」から「原発」……内海　愛子（恵泉女学園大学名誉教授）
4頁・「核抑止力」依存を見直せ……川崎　哲（NGOペースボート共同代表）
9頁・『原発ゼロへの道2017』を原子力市民委員会が刊行……瀬川　嘉之（高木学校）

大河の一滴（23）

「蟷螂の斧」と言われても負けるとわかっていても戦う！

池内　了（軍学共同反対連絡会共同代表）

二〇一四年以来、軍学共同反対運動を行なっているが、時々かつての科学者仲間から「あたかも蟷螂（とうろう）の斧みたいだね」と揶揄される。戦う相手は科学の軍事化を推し進めようとする国家権力であり（具体的には、安倍政権を筆頭として防衛省や文科省や経産省である）、金の力で有無を言わせず囲い込んでくるのだからとても勝ち目はなく、科学の軍事利用は着々と進むことは明らかというわけである。一般に科学者は先行きを読むのに長け、自分の得にならないことには手を出さない人間が多い（さらに貪欲で目端が利く科学者の場合は、御用学者となって国家や企業の使い走りをするようになる）。

しかし、そんな目で見れば核廃絶だってそうで、世界の五大国（米、ロ、英、仏、中）が核保有国としてNPT条約でも特権的地位を保持して、簡単には核兵器を手放すとは思えないから、核兵器反対運動もまさに「蟷螂の斧」ということになる。しかし、ついに国連で核兵器禁止条約が採択されたように、被爆者の粘り強い運動が積み重なって世界の世論を掘り起こしてきたこともあって、ICANにノーベル平和賞が授与された。時間はかかっても世界情勢は変化していくものなのである。今後、この条約に加わらなかった日本政府に態度を翻させ、核保有国を追い詰めていくという方向がはっきり展望できるようになったことにより、核廃絶への確固たる道筋が拓けたことは確実である。

あるいは、地球は無限の大きさのゴミ捨て場とみなして廃棄物を野放図に捨てることが常識であった資本主義体制下の企業の横暴に対して、最初、公害の被害者はまさに「蟷螂の斧」の戦いを強いられた。しかし、「かけがえのない地球（オンリー・ワン・アース）」とか「持続可能性（サステイナビリティ）」の合言葉が世界中に広がるにつれ、自然環境への配慮がない国家や企業は見捨てられかねない状況にまで運動は進んできた。京都議定書が第一歩であったとすれば、パリ議定書は第二歩目であり、今後さらにいっそう厳しい第三歩目が踏み出されるだろう。むろん、歴史は一直線に進むわけではなくアメリカや日本はサボって泡銭を稼ごうとしているが、早晩それに加担する企業は信用を失い没落していくだろう。

人類の最大の目標は「あらゆる戦争の廃棄」である。一切武力に頼らず、話し合いと交渉による紛争の解決、そして平和の構築へと進んでいく道こそ、地球上の全生命が望んでいることであろうと誰しもが考えている。まさに日本国憲法の平和主義は、それを常識と宣言する先進的な指針なのである。しかし、それが世界の常識でないことを理由に、武力による統治を当然として憲法を改悪する動きが現実化している。それが科学の軍事化を加速することに繋がっているのである。

「蟷螂の斧」と言われようと、私は軍学共同に断固反対し、武力を持たない日本を主張し続ける覚悟である。それは市民運動に携わっておられる方々と同じ思いと確信している。

（名古屋大学名誉教授）

〈参考文献〉『科学者と戦争』『科学者と軍事研究』岩波新書。